
メイドさんは田舎者

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドさんは田舎者

【Nコード】

N2827Y

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

いきなり、田舎者からお金持ちになった、御神^{みかみ}叶^{かなえ}。お金持ちが集まるといって、噂の学園「W・H学園」に転入することに。

そこではイケメン5人が集められた、「TOP5」というものがある。自分が田舎者だとバラされなかったために「TOP5」のメイドになることに！

叶の新たな学園生活がスタートした。

転入早々メイドさん！？

「大きな学園じゃな・・・」

校門の前に立って、そうつぶやく。

この学園『W・H学園』は日本中から、お金持ちたちが集まるとい
う噂の学園。

わし、御神^{みかみ} 叶^{かなえ}は今日から、この学園に転入することになった。

実はわし、以前の学校では全校生徒合わせて、十人しかいないとい
うバリバリの田舎出身。

友達と遊ぶのは魚釣り、森での探検や木登り、虫とりなど超自然の
中で育った。

そんなわしが、なぜここにいいのか。そんな事情には父親の転勤が
始まりだった。

村で働いていた父親は、ひょんなことから東京でしばらくの間、働
くことになった。そこで、見事な働きっぷりを披露した。そんな父
親を気にいったのか、社長は父親を副社長に任命。

というわけで、いきなり、お金持ちになったわしは、ふさわしいお
嬢様になるため、この学校に入ることとなった。

・・・にしても、

「この扉、重そうじゃなあ。どうやって開けばいいんじゃない？」

押しても、引いてもびくともせんし、一体ここの生徒はどうやって
この扉を開けとるんじゃない。

「あー、それ。指紋を認証して、パスワードを入れないと開かない
ぜ？」

いきなり、背後から声をかけられたわしは振り返った。

そこに立っていたのは金髪の超イケメン！

「あれ？見かけねー顔だな。名前、なんていうの？」

ぐつと顔を近づけられて、思わず引きさがってしまふ。

「えつと……。わし、じゃなくて、私はここに来たばかりで」
「いかん、いかん。あんまり、見とれて忘れとったわ。ちゃんと、標準語で話さないとな。」

「ふーん。ああ！そういえば、昨日転入してくる子がいるって言うてたな！俺様が直々に学園の中を案内してやってもいいぜ？」

「……は？こいつ、今何と言った？俺様？ま、まさかこいつ、よく以前の学校で流行ってた俺様な性格なのか？いや、こいつより、村の男どもはもつと、謙虚だったぞ！これはあまりにも、態度がでかすぎる！」

「い、いえ。後で、他の人に案内してもらいますので」

あわてて、逃げようとした途端、何かにぶつかった。

「ああ。ここにいたのか。御神 叶。ずいぶんと探したぞ」

ドキツとして、恐る恐る見上げると……。

今度は黒髪に眼鏡のイケメン！一体、今日はどうなつとるんじゃあ！
転入初日から、二人のイケメンに出会うとは！さすがは都会じゃ！
ぽーっと見とれていると、黒髪は一枚の紙を取り出した。

「御神 叶。十六歳。高校二年生。父親の転勤がきっかけに一気に
お金持ちに。元は田舎出身だと聞いたが」

ぐつと顔を近づけられて、ふつと鼻で笑われた。

「丸眼鏡にお下げの三つ編みか。どっからどう見ても、田舎顔だな」
おおー！こいつ！世界中の田舎者を敵に回しよったぞ！

「ちょおい！今何て、言いよった！？もっつぺん、言ってみい！その髪を一本残らず、引っこ抜くぞ！」

はあはあ、と息を切らせるとそう叫んだ。すると、金髪がゲラゲラと笑った。

「何！？コイツ！ガチで田舎者なんかよ！笑える！ぎやはははははは！」

しまった！標準語で話すことを忘れておった！

「あー、笑った。いや、お前氣にいったぜ！良かったな。俺様に氣

にいられる女はなかなか、いないぜ」

なんちゆう事をやってしまったんじゃあ。これじゃ、家族が馬鹿にされてしまう！

わしは頭を下げた。

「頼む！この事は誰にも言わんでくれ！」

「はあ？何で？」「なにか、問題でもあるのか」

「・・・家族を馬鹿にされたくないんじゃ！ここで、本当に田舎者だと思われたら、わしだけじゃない。家族までも、馬鹿にされてしまう！」

黒髪と金髪は黙って聞いていた。金髪は黒髪に問いかけた。

「どうする？」

黒髪はわしの顎をくいっと、つかんだ。

「それでは、お前は何でもすると誓え」

「な、何でもする」

「体を差し出すか」

「か、体じゃと！？」

顔がかつと、熱くなった。

「だれが「別にこちらはお前の本性をばらしてやってもいいが？幸運なことに誰も、お前の情報は知らない。だが、それが一気にばらされたら・・・」」

ぐっ。こいつは悪魔じゃ！

「わ、分かった！この体をくれてやる！」

につと黒髪は不敵に笑った。

「じゃあ、昼休みに会議室へ来い。そこで、お前に働いてもらう」

「では、あとで」というと、いつの間にか開いていた校門の扉を通り過ぎ、二人は姿を消した・・・。

「今日から、このクラスに新しく入ってきた御神さんです。仲よくしてやってください」

「宜しく願います」

パチパチとまばらな拍手が起こった。

「それでは、ホームルームは終わりです。一時間目は音楽です」
そういうと担任は教室を出て行った。

席に着くと、三人組の女が近付いてきた。

「はじめまして。御神さんだったかしら。私、このクラスの委員長を務めております、大崎^{おおさき} 小百合^{さゆり}と申します。以後、宜しく願いますわ」

「は、はあ・・・」

なんじゃ、このグルングルンの縦巻きロール女は。頭にリボンのつかつとるし。派手すぎるのお・・・。

「こちらの二人は私の助手みたいなものですわ。水野^{みずの}と西田^{にしだ}。こちらの二人にも宜しく」

「よ、宜しく」

大崎はふん、と鼻で笑うと髪をいじりながら、言った。

「それにしても、ずいぶんと地味な格好をされてますのね。そんなので、よく、この学校に入れたものですわ。何か、事情がありですの？」

「小百合様、そんな事をいつてはこの子がかawaiiそうですわ」

「そうそう。まあ、でも、この子もこの子よねえ。こんなに地味な格好をして。まあ、この子なら、どんな格好をしても小百合様には勝てませんけれども」

こ、こいつらめ。好き勝手、言いおつて！悔しい！

「あら、二人とも。そんなことはありませんよ。どんなに地味な子でも地味な子なりに地味に努力なさってるものよ？」

ぐはあ！地味地味うるさいんじゃ！

「まあ、御神さん。精々、恥をかかないように頑張つて。おほほほほほ・・・げほっげほっ」

三人は高らかに笑うと、すたすたと席を離れたいった。（結構笑う時にむせとったけどな）

これで、終わりかと思つたわしは甘かった。

音楽の時間は、ピアノというものの演奏。音は間違える。大崎たちには笑われ、さらにはクラスの奴らにまでも笑われた。

次の時間の英会話。何を話すのか分からんし、とりあえず、適当に喋ったら、また笑われ。

三時間目の体育はバレー。ボールは落とすし、顔面にぶつかるし、試合ではわしのせいで、負けて。

四時間目の国語は正しい言葉の使い方。どうやら、尊敬語と謙譲語を間違え、先生には怒られっぱなし。

やつのことで、昼休みへ。早速、お弁当を食べようとした時。

「きやあああつ。TOP5のご登場よ！」

廊下のほうで誰かがそう叫び、騒がしくなった。気になって、廊下を見てみると……。

「あんまり、俺様に見とれていると火傷するぜ！」

「女子の皆様、今日もお美しゅうございます」

あんぐりと口を開けた。なんと、朝に会ったあの、イケメンの黒髪&金髪が笑顔を振りまいている！！

それだけではなく、その周りにくりくりとしたかわいい子や、バラを片手に持っている人、それにピースをしている男の子までもいる。

「みなさん、こんにちは」

かわいい男の子が笑えば、大半がノックダウン。

「皆、元気良くて、安心したわ」

関西弁口調の男の子がウィンクすれば、女子は叫びだす。

「その可愛い子ネコちゃんたち、君たちの瞳は星よりも、輝いているよ」

意味のわからないことを喋るバラの男はふっと笑う。そうすれば、女子の目は完全にハートマーク。

「ね、ねえ。あの人たちは一体……」

近くの人に声をかけた。

「ああ。あなたは来たばかりで知らないのよね。教えてあげるわ。この学園のTOP5のことを」

隣にいた女子が語り始めた。

「この学園には毎年、最もカッコいい男の人を集め、その中で最もカッコいい人を5人、投票で選ぶの。」

選ばれた人たちにはその年にTOP5という称号が与えられるの」「でもね、今年の5人は去年から、ずっとTOP5に居続けているの。学園の歴史上、初めてだそうよ」

「へえ……。すごいね」

「「そうなのよ!!」」

うおっ。びっくりしたわ!

「何といつても、皆凄い美形なのよ!モデルとかやっていますが、おかしくないくらい!」

「俺様な性格の白条 昌樹様」

「黒髪が素敵で、知的で神土的な黒永 飛鳥様」

「愛らしい顔つきの眞桐 萌様。」

「誰にでも、優しくいつも、助けてくれる栄縞 克也様」

「最後にいつでも、美しい顔立ちで、自信家の兒伊田 麗様」

「「どれも最高つつつつ!!」」

い、いかん。この人たちは完全におかしい……。さっさと教室に入って……。

「お、ダサ子じゃん。何やってんの?」

びくつと、体が震えた。

「えつと、お昼にしようかなと……」

「ああ。これはこれは。御神さん」

で、出たあ!悪魔!わしの最大の敵じゃ!

「なんででしょう?」

にこつと笑うと、振り返り、大崎に言った。

「すみません、大崎さん。少しの間、お借りしますね」

ぐつと腕を掴まれ、引っ張られた。

「なっ、なにす」

「それと、放課後の授業に御神さんは出られないと、言っといてく

「ださいませんか？」

大崎はこくこくとうなずき、わしを睨んだ。

わしは異様な目で、見詰められたまま、会議室とやらまで、引っ張られた。

中に無理やり入れられ、扉の鍵も閉められた。

「さて、朝言ったことをまさか、忘れてはいないよな？ 田舎娘」

うがああああ！こいつめ、もう許さん！

「ええ、ええ。忘れてはおらんよ！それより、黒永さんとやら。さつきの女子にたいしての態度とわしに対しての態度がずいぶんと、違う気がするんじゃない？」

黒永はにっこりと笑った。

「貴方の様な、媚びても何のメリットもない人にどのような態度をとればいいのでしょうか？」
ぴきつ。

「なんじゃとおおおおお！」

一発、お見舞いしようと思ったが、白条の一言でそれは止められた。
「バラしてもいいんだ？」

「……」

仕方なく、こぶしを下ろした。

「だ、駄目だよ。喧嘩は。僕は田舎娘も個性があつて、いいと思うよ！」

「……フォローになつたらんよ。」

「せや。なかなか、元気のある子やと思うで。おかげで、耳が壊れるかと思つたわ」

うるさいって、言いたいんじゃない？要するに！

「僕の顔に免じて、飛鳥を許してくれないか、セニョール」
何を言つとるか、わからんよ、セニョール。

「で、ココに連れてきたわけなんだけど……」
ごくつと、唾を飲み込んだ。

ああ、わしは一体何をされるんじゃない。オカン、オトン、娘のわしは

ついに・・・。

「ここで、俺様たちの雑用をやってもらうぜ。ありがたく思え」
「・・・はい？」

「補聴器が必要か？田舎娘」

「いらんわ！まだ、三十路さえも超えとらんわ！

「せやから、俺らのメイドになってもらうんや」

「メイドおおおお！？」

「そ、メイド」

「・・・ってなんじゃ？」

「ずこつつつ！

なんと！黒永意外、全員椅子から、転げ落ちたわい！

「な、なあ。ホンマにこいつ、大丈夫なんか？」

「僕、メイドのメの字も知らない人に生まれて、初めて会ったよ」

「Oh！何ということだ。神よ、こんなかわいそうな子猫にどうか、幸福をつつ・・・」

「ぎやはははは！やつぱし、コイツ、おもしれえ」

「ただのバカなんじゃないのか」

「なんじゃなんじゃ！人を馬鹿にしおつて！

「要するに俺様たちはご主人さまで、お前はご主人様の命令には絶対に従らつてはいけないんだ。わかったな」

「そんな、勝手な！」

「いやなら、バラしても、ええんやで？」

「つと栄綱は笑った。

「いやなら、いいんだよ？」

「真桐は上目づかいで言うし、

「ちなみにご主人様って呼んでね？セニョール」

もう、メイドになるっていう前提で、兒伊田はウイंकをする。

「さあ、どうする？田舎娘」

悪魔の笑みを振りかざす、黒永。顔に断ったら、バラすぞって書いてあるし。

そうなたらもう、断れるわけないじゃろっ！弱みも握られてるんじゃないからな！

「宜しく願いますっ！ご主人様！」

「『宜しく、メイドちゃん』」

ああ。これから毎日、きつと気の休める日は来ないんじゃないかな……。かくして、叶の学園生活は始まったのだった。

続く

転入早々メイドさん！？（後書き）

まだ、書き始めたばかりの未熟者ですが、宜しくお願いします。

メイドさんと鬼っ子」

日差しが照らす、大きな学園の朝を一人の少女が歩いている。

ああ・・・。昨日は散々じゃった。転入早々、笑われるし、馬鹿にされるし。

何より、

「よう。ダッサダサのダサ子ちゃん」

「おはよう、田舎娘」

「飛鳥君、白条君！そんな事を言ったら、駄目だったら！あ、おはよう」

「おはようさん、ホンマにええ天気やな。な、御神」

「Good morning！今日も、個性的な格好だね、セニョール」

・・・こいつらの世話もする事になってしまったしな（怒り）

「おはようございます、TOP5の皆様」

にこつと、媚を売って見せる。

けっ！どうじゃ、このお嬢様らしいあいさつは！昨夜から、研究に研究を重ね、ついに辿り着いた結果じゃ！

すると、白条が口元を押さえ、こちらを凝視している。

「うわ、ダサ子がお嬢様ぶってる・・・。この俺様に！」

昨日から、俺様、俺様、うるさいのう！

「田舎娘がいくら、媚びても・・・。あ、頭痛薬と吐き気止めは無いのか？克也」

そこまで、嫌じゃったんか！っていうか、そこまで言わんでもええじゃろっ！

「無いな。すまん、こういうの予想してなかったんや。逆に俺がほしくらいや」

うるさいわ！お前まで、そんな事言っんか！

「Oh！ここまで僕のことを考えてくれてたなんて、光栄だよ！子猫ちゃん」

お前の事なんか、ミジンコも考えてないわ！子猫ちゃんでもないわ！
「え？僕は良かったと思うよ」新しいコントみたいで！」

・・・天使の顔でも、心は鬼じゃな。

はあ。もう、ええわ。こんな奴等に構つとつたら、きりが無い。

「ああ、今日は放課後に会議室の掃除を頼むぞ？」

「なんじゃとお！？そんな事ぐらい自分でできんのか！！」

につこりと笑いながら、黒永は眼鏡をくいと、直した。

「そうですか、残念です。では、あの約束は無かったことに・・・」

「だあああああつ！やりやあ、ええんじゃろ！？」

白条も、ゲラゲラと笑いながら、言う。

「そうだよ、それで良いんだよ。俺様たちには逆らえないんだからな。じゃな、ダサこちゃん」

「ばいばい。あとでね」

「しばしの別れだよ、セニョール！」

「ほな、またな」

「時間厳守だ、田舎娘」

好き勝手言ってから、がやがやと過ぎ去っていった。

くそつっ！あいつらは化け物じゃ！卑劣な化け物じゃあああああ
ああ！

「あらあ、ごきげんよう。御神さん」

また、あの三人か・・・。

「何の御用ですか？」

「ええ・・・実はね」

・・・おっ！？な、なんか、迫力が昨日と全然違うぞっ？いや、それだけでは無いな。

なんと、クラスの女の子が立ちあがって、わしの周りをぐるりと囲った。

「どうやら、昨日TOP5の皆様と楽しくされてたようですね？一体、何をなさってたのかしら？」

「そ、それはこちらの事情で言えないのですが・・・」

「うわあ！ぎろりと睨まれたぞ！？大崎だけじゃないぞ。女子の皆、全員じゃ！」

啞然としてると、周りの女子どもが口々に叫んだ。

「言えない？言えないってどういう事よ！？」

「ダサい女のくせに！白条様たちの周りをうるつくなんて！」

「どうせ、成り上がり系でしょ？私たちより、下の分際で近付こうなんて、五百年早いのよ！」

その瞬間、頭が真っ白になった。

私達より下の分際？ダサい女？何で、何で、そこまでお前らに言われなきゃ、いかなのじゃ！

「ちよつと、勘違いもいい加減に「何をなさってるのですか？お嬢様の皆様方」」

りんと、聞き覚えのある声が、後ろのほうから聞こえた。

「く、黒永さま！！！」

「楽しそうじゃん、俺様も混ぜろよ」

「白条様も！？」

ほつ。女子どもは皆あの二人のほうへ、あっちゅうまに集まってしまった。おかげで、すっかり賑やかになり。

「きゃあきゃあ、うるさいのう」

ボソツとつぶやいた。本当にあいつらには敵わんわ。

「それより、今日の体育楽しみですわ。TOP5の皆様たちと合同なのでしょう？」

「ええ。今日は2学年総合での授業ですからね」

「一体、何をなさるのかしら？」

「実は、まだ決まってるじゃないんだよな」

後ろの会話をじっと聞いていた。

2学年総合じゃと！？しかも、あいつらとまた、会う事になるんか

！そ、それは絶対に避けたい！

何としても、一緒になど出来るものか！

コソコソと、体育の授業を休むための手続きをしようと、席を立った瞬間！がしつと肩を掴まれた。

「ですので、御神さん？ぜひとも、提案をお願いしたいのですが？」

「え？い、いや、私は・・・」

「断るのか？俺様もお願いしてやろうと思ってたのに」

その時、ヒソヒソと話し声が聞こえた。

「まあ！あんなにも熱心に黒永様をお願いをしているというのに・・・」

・

「え？断る気ですの？」

「かわいそうだわ」

ええ！つつつつ！？

その時、大崎が一步前へ歩み出てきた。

「まさか、TOP5のお願いを断るなんて事はもちろん、しませんよね？」

女子一同、につこり。わしも苦笑いをにつこり。

「もちろんです。是非とも私にお任せください」

もちろん、この迫力じゃ断れるわけでも無い。

お前ら、さっきの言ってることと、真逆じゃないか！

「いくらなんでも、ふざけすぎじゃあ！」

朝っぱらから、怒涛の叫び声を会議室に響かせる。そんなわしを黒永は睨みながら、耳を塞ぐ。

「あの状況を助けてやっというのに、怒鳴られるとは心外だな」

「本当だぜ。黒永はともかく、俺様に礼の一言もなしだよ」

「・・・何故、おれはともかく、なんだ？」

「へへっ。なんとなく」

「へへっ。なんとなく、じゃないわ！また、お前らが借りるなどと言っから、勘違いされて睨まれたじゃないか！どうしてくれるんじ

「やあ！」

「はあはあ、と息を切らしてぎつと、二人を睨んだ。

「大体、授業の内容なんか、決まって無いわけじゃ、無いじゃろつ。そんな、先生の急病でも無い限り・・・」

「それが、体育の先生が急病で倒れた」

ズコツツツツ！

「そ、そんな事が」

動揺しているわしをよそに、パラパラと紙の束をめくり始めた。

「昨日、午後2時59分。先生が次の体育の準備をしている途中にカエルと遭遇。先生がそれを目撃した瞬間、気絶し、40度という高熱を出し、今日は休暇を取っている」

一通り、言い終わるところを見た。

「ということで、何か無いか？田舎娘」

「カエルと遭遇しただけで、気絶。しかも、高熱って・・・」

わしは腹を抱えて、うずくまった。

「お、おい田舎娘？」

「大丈夫か、おい！」

「ぷッ」

「「ぷ？」」

「ぷッ、ははははははははッ！」

「な、何だ？突然笑い始めたぜ？」

「カ、カエルを見ただけで、気絶じゃと！？しかも、高熱！？体育の先生のくせに情けないのう！わしら田舎者なんか、カエルとは友達みたいなもんじゃ！なのに、高熱って、気絶って・・・ぶっ！くはははははははッ」

しばらく笑うと、ひーっ、ぜーっと、息を整える。

「まったく、大した事無いのう。金持ちも」

「・・・で？何か、思いついたか？」

嫌そうな顔をしながら、黒永は聞いてきた。

「思いつくも何も、鬼っこなんてのはどうじゃ？」

「鬼ごっこ?」

「そうじゃ、やった事あるじゃろ?」

二人は急に、黙り込んだ。

え?まさか、これは・・・。

「まさか、お前ら、鬼ごっこもやったこと無いって言うんじゃない?」

「ない」

「ぎやははははははっ」

「なっ!何が可笑しいんだよ!」

「笑っている理由が分からないな」

ムスツと二人は聞いてくる。ま、まさか、鬼ごっこもやった事ないなんてな。

「はあ、これじゃから金持ちは・・・。でかい顔をしてるが、実は鬼ごっこも知らない世間知らずなんてな。まさに、井の中の蛙じゃない」

「金持って、お前も金持ちになっただろう?」

「そうだぜ!馬鹿にするのもいい加減にしろよ!」

ふん、と鼻で笑って見せる。

どうじゃ、今までの仕返しじゃ!

「仕方ない。お前らに教えてやろう!鬼ごっこことはな・・・」

こうして、会議室はしんと静まり返り、一人の少女の声しか聞こえなくなった。

キンコーン、カーンコーン。

チャイムが鳴った。既に体育館には2学年全員が集まっていた。

「それでは、鬼ごっこスタート!」

黒永が合図を掛けると、一斉に皆は走り出した。皆、外へ飛び出し体育館にはわしと黒永の二人きりとなった。ルール説明もし、じゃんけんで鬼決めもした。

鬼は合計5人。その中には白条もいた。「俺様が鬼!?」と信じられないという風に絶望していた。

いやああつと、女子からは奇声が。男子からは喜びの雄たけびが上がった。

わしは静かに音を立てずに、ステージの上でのんびりしている、黒永の傍へ近寄った。

「お前は参加せんのか？」

黒永は優雅に紅茶を飲んでいる。・・・腹がたつのう。

「お前も、隠れなくていいのか？見つかつて、鬼に捕まるぞ？」

「ふつ。なあに、心配は無用じゃ。わしは自然の中で育ったからの。お前らみたいな、ヒヨっこに捕まりはせんよ」

なんせ、森で鍛えられたからの。簡単には捕まらんぞ！

「お手並み拝見といこうか？」

試すような眼で見つめられ、わしの闘争心が燃え上がった。

「望むところじゃ！」

そう、黒永に言った瞬間「見つけたぞ！」という声が、体育館にこだました。2人のうち1人がステージに上り、1人はわしの目の前で構えていた。

なるほど、挟み撃ちじゃな？じゃが、わしには・・・。

ダン、と足をけり上げた。ステージの前で構えておった男の上を思いつきり、飛び越えた。

今まで、一度も、村の人たちでさえも捕まった事は無いんじゃない！そう簡単に捕まって、たまるかの！

わしは大きく息を吸うと、思いつきり叫んだ。

「見てなさいよ！黒永！あんたに私の実力をみせてやるわ！」

わしは外へ飛び出た。振り返ると、遠くで、黒永が笑っていた。

ふん！その笑いも、いつまで続くかの？

空を見上げると、きれいな青空だった。

まだまだ、鬼ごっこは始まったばかりだ。

メイドさんと鬼ごっこ（後書き）

途中で終わらせて、すみません。時間がありませんでした。
一人でもいいから、読んでもらえたら光栄です。

メイドさんと鬼っつこ(続)

「おーし！女子どもは皆、俺様が捕まえたぜ！ま、女子だけだけだな」

「……」

「何だよ、お前ら。なんか、文句あるのか」

「いえ、別に……」

お前はどんだけ、女が好きなんじゃ！

わしは木の上から、じつとその様子を見ていた。遠くで、白条が女子どもを連れて、ハーレム状態ができている。女子どもからは、どピンクのキツイオーラが出とるし……。

「あ、見つけたぞ！」

白条が木の下の方を指さした。下は茂みがあつて、つられて、下を見ると、長い髪の女の子がうずくまっていた。

足音が近づいてきた。じゃりっ、じゃりっと言が鳴るたびにびくつと、肩が震えている。

仕方ないの。

わしは下に降りて、女の子をつん、とつついた。

「ひっ！」

「安心して。わたしは鬼じゃない」

につこりと笑って見せれば、女の子は、コクコクと首を縦に動かした。

「このまま此処にいたら、絶対に見つかるよ。ほら、わたしの背中に乗って。おんぶしてあげるから」

「え？でも……」

「いいから、ほら」

女の子はおずおずと、背中につた。そして、か細い小さな声で、「よろしく願います」

と言った。

思いつきりサッカーボールを蹴った。見事なくらいの直線でサッカーボールは男どもをなぎ倒した。

「ゴール！」

「す、すごい・・・」

後ろで祿音寺さんはつぶやいた。ぐるりと頭だけを祿音寺さんに向けて、「じゃろ？」とほほ笑んだ。

「でも、何かさつきと雰囲気が」

ぎくつ。しまった！我を忘れて、田舎語に・・・。

「これはね、脅しだよ、脅し」

「え？」

「本当はさ、これで脅して、逃げてもらおうと思ったのになかなか逃げないからね。つい」

「は、はあ・・・」

ふう。何とか、ごまかせた・・・。

「さあ、逃げようか」

一歩足を踏み出した瞬間。

「御神叶、祿音寺怜奈。鬼に暴行を行ったため、失格」

と肩を掴まれた。え、と思って、後ろを振り返ると・・・。

「残念でしたね、御神さん。せつかく貴方の実力を拝見したかったのですが・・・」

黒永！いつの間に！！

「そういう事で、鬼ごっこは終わり！」

「そ、そんな。ルールでは言ってますでした」

「そうよ！」

黒永はくすつと笑った。

「いえ、途中でルールが変わったのですよ。なかなか、貴方達が捕まらないもので」

「だったら、それを伝えなくちゃならないんじゃない・・・」

「俺様達が伝えようとしたのに、お前らが逃げたんじゃん」

「しかも、サッカーボールで男子どもをなぎ倒しましたからね」

「え？じゃあ、まさかあの時待てって言ったのは」

「ルールを伝えようとしたんだよ。でも、終わったからどうでも良いだろ」

「どうでもいいわけ無いじゃろ！そんな、わしが都会の奴に負けただなんて・・・」

「あゝあ。疲れた」

「体育館で紅茶とお菓子が食べられるぞ。皆、もう既に食べているがな」

「おう、そつか。で、こいつらどうしよう？」

「心配無い。後で、俺のボディガードに運ばせる」

「了解」じゃ、祿音寺さん、行こうぜ」

「え、はい・・・」

白条と祿音寺さんは体育館に向かって、歩き出した。わしは白条と祿音寺さんが豆粒みたいになくなったときに低い声で、あいつの名を呼んだ。

「・・・おい、黒永」

「ん？」

「お前、こうなる事がわかってただろ」

わしが体育館から出る前、遠くで見えたあの笑み。あれは絶対にわしを捕まえるために何か考えていたんじゃない！

黒永はにこつと笑って、口を開いた。

「馬鹿は扱いやすく、実にいいな。おかげで、面白いものが見れたよ」

き、貴様あ！なんちゅう奴じゃ！

「さて、体育館へ戻ろうか。お前も、紅茶だけは飲みたいだろ？」
クッククツと笑いながら、歩き出した。

「ぜ、絶対にお前だけは許さん！いつか、わしの目の前で這いつくばらせてやるぞ！黒永！！！」

ひらひらと遠くで、手を振るのが見えた。

どんなにわしが馬鹿にされても、絶対に黒名がだけは負かしてやる

ぞ！

天に向かって、誓った。空は悔しいくらいの快晴だった。

メイドさんと鬼ごっこ(続)(後書き)

この前の続きがようやく、書けました。
感想をくれると有り難いです。

メイドさんじゃんけん

「はい。つーことで、メイドさんの服がきました」

・・・なんつつつつつじゃこりゃあああ！

はい、真つ昼間から叫んでしまつて申し訳ないです。田舎娘、ダサ子こと御神叶ですつて、そんな事どうでもええわ！昨日は走りすぎ、叫びすぎて体力が無いのになぜこんなに叫んでいるかというところ。

「何つて、メイドさんの服や」

「これ着て、僕たちのお世話をするんだよお」

「Wonderful！素晴らしいじゃないか！！君に似合っているよ！セニョール」

「・・・・・・・・」

「メイドさんの服や、なんて言われて納得できる人間がおるんか！！なんじゃ！そのピラッピラの服は！リボンが付いているのは仕方ないとして（むしろ、そこしか納得できていない）スカートは異常なほどに盛り上がってるし、その中には白いフリフリがあるし、なにより、エプロンみたいな服のくせして、そんなにど派手なのが気に入らない・・・はあ、はあはあ・・・」

あ、あかん。早口でこんな長いセリフをしゃべってたら、息が切れて切れて。

「うん、エプロンの改造版つて思つてくれて構わないよ」

そうです、来てしまったんです！メイド服！想像より違いすぎる！もっと、うちのばあちゃんが着てたかつぽう着みたいなものかと・・・。

「そんなに騒ぐな。うるさいぞ、田舎娘」

お前こそ田舎娘、田舎娘うるさいわ！

「良いなあ？僕もこういう可愛いのが着てみたあい？」

「も、萌。女装の趣味があつたんか・・・」

「おい、萌。克也がお前に女装という変態趣味を持っているのかって、疑ってるぜ」

「え？なあに？僕がなんだって……？克也君」

「あつただだだだだだ」

バンバンと床を叩く、克也。その背中に乗っているのは萌。克也の腕を背中にまわして、ぎりぎり腕をひね上げる。

なんという地獄絵図……。天使が人間の腕を今にも、折ろうとしている世にも奇妙な地獄絵図……。

「お、おいおい。もうその辺にしろいたほうが良いんじゃないか？離してやれよ」

白条は慌てて、萌をなだめる。しかし、萌の眼はぎらぎらとまさに、小悪魔……。あれ？こういうのって小悪魔ええんじゃったけ……？

「どうでもいい事に頭をフル回転させるな、田舎娘」

「なっ！？お前はユリ・ゲラーか？人の心を読めるのか？」

「そのネタは古い。あと、心は読んでいない」

「へっ？」

「自分でさつきから、ぶつぶつと言ってたぞ」

「なんと！」

「ちなみに地獄絵図がうんたらかんたら、というところからな」

「はあ……。今度から気をつけないとな」

二人で話していると、白条が叫んだ。

「だっから、さつきから何を話してんだよ！？俺様たちが今、頑張ってるのが目に入らんのか！？」

「oh！もう、そろそろ克也の方も限界だよ！何とかしてくれないか」

「いだだだだだ。すまんかった、えらいすまんかった！！」

「謝って済むんなら、警察はいらないよねえ？そうでしょ？叶ちゃん」

「お？まあ、そりゃ、そうじゃな。うむ、ちゃんと善意を持って、

謝らんといかな」

黒永は眼鏡を押さえて、叶を睨んだ。

「萌の味方をしてどうする？」

やれやれとでも、いう風に頭をふった。

「く、黒永。助けてくれんかつ？」

「・・・百万で」

「金を取るんか!？」

ギヤーギヤーと騒いで、本当にうるさいのう。おっと、そうだ。まだ、弁当は食べとらんかったわ。

ふたを開けた。今日はでんぶのかかったご飯に伊達卵焼き、ほうれんそうのおひたし、デザートの手作りの柚子ケーキ。

「お?くんくん・・・」

萌は腕を離して、鼻をひくつかせて、こちらへやって来た。わし&白条一同、呆然。

「な、何じゃ？」

わしに構わず、くんくと鼻をひくつかせる。

「なんか、甘いおいがする。ピンクのこれ、何？」

指をさしたのは、でんぶのかかったご飯。

「おや?これも、知らんのか？」

「うん。僕、和風はあまり、食べてないから」

けっ!金持ちは日本の誇りも忘れとんのか。

「これはな、でんぶと言って、ご飯の上にかけるんじゃ。甘いぞ」

「ご飯に!?ね、ね。一口頂戴っ!」

あゝんと、口を開けて早くといわんばかりにせかす。

やれやれ。こういう顔は可愛いのに。

にっと笑って、箸でご飯をつまんで、口に運んであげた。そうするとともぐもぐと、口を動かして、目をキラキラさせた。

「おいしい!これ、おいしいよ!」

「そんなに気にいったんか?なんなら、明日作ってあげよう」

ああ。もったいないのう……。こんなに可愛い顔してるのに。
「ふう……。とりあえずは収まったみたいやな」

安心な顔して、黒永&萌以外はー安心。

「やれやれ。お前らには手が焼けるぜ！」

足をどかつと、机にだらしなくのせた白条は肩をすくめてみせるポーズをして見せた。その瞬間、部屋の中の空気がさつと、凍りついた。

寒っ！！何じゃ、この北極みたいな温度は！さっきとえらい違いじゃな！

「白条君、今のは聞き逃せないなあ」

「Yes！僕も、今のは力チンと来たね」

「大体、お前がバラしたから、大変なことになったんやろ！」

「ちよつと、待て！俺様のせいだよ！？お前が言っただのが悪いんだろ！」

「そうだね。人のせいにしちゃ、いけないよ」

「だが、お前のせいで、読書の時間がずいぶん減ったんだぞ。それも分からない馬鹿には少し、躰が必要だな」

「そうや！この馬鹿ピーマン！！」

「ああ？ピーマンってなんだよ！ピーマンって」

「それを言ったら、ピーマンに失礼だろう」

「うっせーよ！この頭でっかち脳みそカッチコチの眼鏡野郎。そもそも、読書なんてしてなかっただろ！」

「……貴様、今すぐその髪の毛一本残らず脱毛剤に浸してやる！！」

「やれるもんなら、やってみやがれ！！」

「NO！それは駄目だよ。どうせなら、脱色剤にしないと」

「いや、それもアカンな。どうせなら昭和の野球坊主みたいな髪型がええな。すつきりするし」

「ええ？違うよ、もっと伸ばして、パーマをかけようよ、きつと似合うよ」

「お前らあ！いい加減髪から離れろ！」

ギャー！とまあ始まった。よくやるのう。

「ほら、うるさいぞ。もう少し、静かにできんのか！」

バンと机をたたいて、叫んだ。すると、見事なくらいにシーン……。

「せっかくの昼休みなんじゃ。もう少し、楽しめる遊びとかしたらどうなんじゃ」

「遊びねえ……。あ？ああー！」

なんじゃ、いきなり大声を出して！さっき静かにしろうたったのが聞こえなかったのかあ！

「じゃんけんで負けた奴がメイド服を着て、皆の命令に従うってのは？」

なにっ！男がこんなスカートがめっちゃ短い、ピラッピラの服を着るんか！き、気持わるいのう。

「面白そうだね。ようし、僕はじゃんけんには強いから負けないよ」

「せや！俺も、勝負事には強いで」

「チツチツ。ぼくこそが真のじゃんけんkingだよ」

「俺は負けることが一番嫌いだから、負ける気がしないな」

「つまり、負けず嫌いって言いたいんじゃないやろ。そんな遠まわしに言わんでもええ！」

ふっ！そんなわしも、実は負けず嫌いじゃ。こいつらのメイド服姿を嘲笑ってやる！

「おらおら。うるせーぞ！行くぜ、せーの……」

「「「お金持ちは後だし駄目よ、じゃんけん、ばい！！」」」
……………」

「はい、ダサ子の負けーっ。つか、出すの遅すぎなんだよ！」

「何をやっても駄目だな、田舎娘」

「ま、ドンマイや！」

「ごめんねえ」

「I, m s o r r y.でも、勝負は勝負だよー！」

・・・ま、そうじゃよな。勝負は勝負じゃ、仕方ない。わしが負けたんじゃから、ここで潔く負けを認めよう。じゃがな、一言だけ言つてええか？

「じゃんけんのセリフが長すぎじゃろおおおおおおお！！」

なんじゃ！お金持ちは後だし駄目よつて！だったら、お金持ちじゃない奴等は後だししてもいいんかい！

「あ？じゃんけんって普通これだろ？」

「お前の普通は普通じゃないじゃろっ！」

「何だ、愚民どもはじゃんけんをやらないのか？」

「じゃんけん自体はやるわ！その長い前ゼリフはいらんのじゃ！」

「えっ？本当に？なんか、一般人って変だね」

「わし等一般人から見たら、お前の方が変人じゃ。お前、本当に小悪魔じゃ・・・」

「でも、どんなじゃんけんをしても、僕は一般人のセニョールも beautiful さ」

「何言ってるか分からん・・・。っていうか、お前はせ、セニョール（？）なら誰でもええんじゃろっ！」

「なんや、それなら一般人はどんなじゃんけんをするんや？」

「わしには今までのセリフの中でお前が一番、まともに聞こえるよ！ため息をついてから、じゃんけんを教えようとした。その時にガラツと扉が開いた。

「あ、あの・・・」

「あつ！怜奈！」

そう、前回に出てきた、怜奈のご登場じゃ！うほ。まじかで見ると、一段と可愛いのが、髪はさらつと長いし、瞳は・・・ほう！大きいんじゃな。くりつとして可愛ええのう！（↑ただの変態）

「ちょうど良かった。のう、怜奈はじゃんけんってどうするんじゃ？」

「え？じゃんけんですか？そうですね・・・」

いや〜。怜奈はこの馬鹿達と違って、まともじゃからな。普通に「最初はグー、じゃんけんぱい」ってするじゃろ。

「お金持ちは後だし駄目よ、じゃんけん、ぱい」
ちーん……。

「あ、あの、どうしたんですか？叶さん」

「いや、わたしにはお前がかわいそうに思ってくるよ……。この馬鹿丸出し異常者共と同レベルなんて……」

「え？」「どういう事だよ、ダサ子！」

「うん。大丈夫じゃ、わしが必ずお前に正しい道を歩ませてやるからの！」

「え？あ、はあ……」

「無視してんじゃねえよ、ダサ子」

「そうじゃ、怜奈は何で、ココに？」

「メガホン使ってやろうか！？」

「あ、実は叶さんと、その……」

「Oh, no！録音寺さんも無視なの？なんか、昌樹君、かわいそうだよ」

「……どうせ、どうせ俺様なんか。なんか、俺、自信無くなってきた……」

「そんな！元気出して、白条君！元気出して！僕らがいるよ！」

「いや、それ以前に自信無くしてるくせに、まだ自分に様をつけるのか。落ち込んでるのか、落ち込んでないのか……」

「いや、これは昌樹なりの自分で慰める方法なんや」

「ああ、もう！うるさいんじゃない！こっちの話が聞けんじゃろ！」
しーん……。

「さ、話してええぞ」

「あ、そのと、友達になれないかなって……」

うじうじと、怜奈は答えた。

うつ！可愛い！こんな風に言われたら、断る事は出来ないに決まっておる！

「わしはもう、友達だと思っとなぞ」

そういうと、怜奈の顔は花のようにぱつと明るくなった。

「あ、ありがとう。これから、宜しく願います」

「敬語なんて、使わんでええんじゃ。そのかわり・・・」

「はい？」

「正しいじゃんけんは覚えてもらっぞ」

「はい！」

につこりと怜奈は笑った。これがまた可愛い！

「あ、僕も僕も」

「Meも」

「ま、一般人の常識ぐらいいは頭に入れておくか」

「ほな、俺もつと」

「ええか、一般人はな・・・」

それから数分後、TOP5と怜奈は本人たちいわく、「一般人のじやんけんゲーム」にはまったとさ。

その時の白条。

「どうせ、俺はわきキャラだよな・・・。はは」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2827y/>

メイドさんは田舎者

2011年11月18日08時15分発行